

保育者の就業自己イメージの変容 — 幼稚園実習前後の就業自己イメージの比較 —

樟本 千里, 小河 晶子, 岡田 恵子
伊藤 智里, 中井 靖

Changes in Self-Image after Attaining Occupation before and after Education Practice in Kindergarten

Chisato KUSUMOTO, Akiko OGAWA, Keiko OKADA,
Chisato ITO and Yasushi NAKAI

キーワード：就業自己イメージ, 幼稚園実習

概 要

本研究は、保育者養成校の学生を対象に、修学期間中の就業自己イメージの変容について検討した一連の研究の一部である。一連の研究では卒業後に取得する免許や資格に関連した仕事の現場を直接体験する、いくつかの実習をとりあげ、実習の前後で職業意識を比較している。本研究では学生にとって3番目の実習となる幼稚園実習をとりあげた。前回の施設実習後から約8ヶ月が経過した後に実施された4週間の実習である。実習後、学生の就業自己イメージには、競争性、自閉性、融和性の低下が認められた。幼稚園実習は学生の就業自己イメージに対してこれまでの保育実習や施設実習とは異なる影響をもたらしたといえる。

1. 緒 言

青年にとって、進路選択は重要な課題のひとつである。なぜなら、将来の自分の姿を見据え、「自分は何者か」「自分には何が適しているか」について考え、大きく舵をとることを余儀なくされるからである。また、大学、短期大学にとっても、学生への進路指導・進路支援は重要な問題である。大学新卒者の早期離職の理由は「仕事が自分に合わない」というものであること¹⁾や、早期離職の原因が、学生時代の進路選択時に志望する道を選べていない、生涯における職業的な自己実現について考えられていないという指摘がある²⁾。したがって、進路指導・進路支援の際に、選択した職業に就いている自分のイメージをある程度確立するよう方向づけることが求められる。

一般企業への就職活動の場合、多くの学生は大学生活を始めてから希望する職種や企業を選択する。しか

し、専門職の場合その中でも職業教育の色が強い短期大学の場合では、入学の時点で将来の職業選択を行っている。したがって、短期大学の生活は、選択した職業に就くための資格や免許を取得するためのものであり、職業に就くために必要不可欠のものである。また、選択した職業のイメージを強化し、確立していく時期である。短期大学の生活の中で、将来就くだろう仕事のイメージを構築していくプロセスを追うことは、学生を理解し、指導・援助していく上で非常に有益である。

これまでの大学生・短大生の職業選択行動に関する研究は、就業前の自己概念や自己効力感との関連性を検討したものが多^{3)~5)}。それに対し、清水ら⁶⁾は、職業を選ぶ場合には就職後の自己の生活ぶりや自己の姿を思い描き、就業に伴い自己が周囲の環境からどのような影響を受けるのかを予想し、職業を選択していかうとする場合もあると考えた。このような問題意識の中から、見通しの観点を重視し、大学生の就業自己イメージ尺度を作成した。

筆者らは、平成17年度新設の医療保育科に入学した、女子短大生の進路選択および職業意識について検討し

(平成19年10月10日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

てきた^{7)~9)}。その結果、自己実現への達成動機と情報取り入れの双方を併せ持つことが、職業意識を高めること⁷⁾、自己実現への達成動機と情報の取入れが、自己高揚性、すなわち職場でのリーダーシップを発揮している自己や、周囲から尊重される自己のイメージを高めることが示された。医療の専門性をもつ保育者に対する社会的ニーズは高まっている。したがって、学生が得る医療の専門性をもつ保育者に関する情報は、「望まれている」という良いものが多い。しかしながら望まれている具体的な業務の内容や、それに伴う困難さについてはおそらく想像もしていないに違いない。また、医療保育科では、取得できる免許・資格は幼稚園教諭2種と保育士資格であり、在学する多くの学生が進む就職先としては保育所や幼稚園が多いだろう。このような現状から、保育の現場を垣間見ることができるとしての重要性、そこで職業のイメージを確立していくことの重要性を指摘した⁷⁾。

本研究は、清水ら⁶⁾の就業自己イメージ尺度を用い、「実習」に焦点を当てて学生の就業自己イメージの変容を追った、伊藤ら⁹⁾、岡田ら（未発表）に続く第3弾である。医療保育科では、2年次に保育実習を行なっている。保育実習は保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲから構成されている。保育実習Ⅰでは、保育所での実習と、保育所以外の児童福祉施設での実習をそれぞれ10日間行なう。保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲはどちらか一方の選択であり、保育実習Ⅱは保育所での実習、保育実習Ⅲは保育所以外の児童福祉施設での実習となる。3年次には幼稚園教諭2種免許にかかわる教育実習が幼稚園において4週間行われている。本論文では保育所での実習を保育実習、保育所以外の児童福祉施設での実習を施設実習、幼稚園での教育実習を幼稚園実習と呼ぶ。

学生にとって初めての实習だった保育実習の経験は、学生の就業自己イメージの、独自性、自己高揚性、支配性を高める効果をもたらした⁹⁾。保育所実習中に乳幼児に慕われ、楽しい時間を過ごせたという経験が保育士になることへのイメージをさらに肯定的にし、自分の指示が通るという経験などから、乳幼児と接することへの自信につながったと考察されている。すなわち、学生は保育実習に行くことで「保育士は自己実現できる職業だ」ということを確認してきたことが述べられている。

次に、岡田ら（未発表）は保育実習から約2ヶ月後に実施された施設実習の経験が、学生の就業自己イメ

ージに与えた影響について検討している。その結果、独自性は保育実習に行く前と変わらないところまで得点が低下した。自己高揚性は、保育実習へ行ったことで高まったままの得点を維持していた。保育実習前後を通して得点の変化がみられなかった拘束性は、施設実習後に得点の低下がみられた。保育士としての特徴を打ち出すなどの、自らの独自性が見出しにくく、施設では保育所に比べて、職業規範や行動の適切性、時間や人による拘束性が低いと感じたのだろうと論じられている。すなわち、学生は施設実習に行くことで、保育所保育士と施設保育士の違いを感じたと考えられる。

本研究では、施設実習から約8ヶ月後実施された、幼稚園実習に焦点を当て、幼稚園実習が就業自己イメージに与える影響について検討することを目的とした。

2. 研究方法

1) 対象

本学医療保育科へ平成17年度入学した女子学生71名。なお、分析に対しては、記入不備や実習前後の回答が揃わなかった16名を除外した計55名を分析の対象とした。したがって、有効回答率は77.5%であった。

2) 調査時期

幼稚園実習前は9月、幼稚園実習後は6月に行なった。

3) 質問紙の構成

(1) 就職希望：短期大学を卒業後、資格（保育士資格および幼稚園教諭免許）に関連した職種に就職するか否かを尋ねた。

(2) 就業自己イメージ：清水ら⁶⁾による大学生の就業自己イメージ尺度を用いた（資料1）。これは、「独自性（12項目）」、「競争性（11項目）」、「自閉性（14項目）」、「自己高揚性（7項目）」、「拘束性（11項目）」、「支配性（5項目）」、「融和性（5項目）」からなる7因子65項目の尺度である。各項目に対して、現在の気持ちを「きわめてそう思う」～「きわめてそう思わない」の7件法で尋ねた。

4) 分析方法

幼稚園実習（4週間）をはさんで実施した調査で得られた結果を比較した。幼稚園実習を経験することで就職希望が変化したか否かを明らかにするために、 χ^2 検定を用いて人数の偏りの違いを示す。また、幼稚園実習を経験することで就業自己イメージの7因子がど

のように変化したかを2要因の分散分析を用いて明らかにする。

5) 倫理的配慮

調査者の指示のもと、授業時間内に実施した。フェイスシートには、個人名が出る事はないこと、学業成績に関係しないこと、調査結果は統計的に処理することを明記した。また、実施の前に調査への参加は自由意志であることが調査者より説明された。

3. 結果

1) 就職希望

卒業後、免許・資格に関連した職種（保育士、幼稚園教諭）に直ちに就職する予定か否かを尋ねた結果を表1に示した。幼稚園実習前に、「就職する」を選択した人数は45名（81.8%）、「就職しない」を選択した人数は7名（12.7%）、「不明」が3名（5.5%）であった。幼稚園実習後は、「就職する」を選択した人数が47名（85.5%）、「就職しない」を選択した人数は4名（7.3%）、「不明」が4名（7.3%）であった。 χ^2 検定の結果、実習前後で人数に偏りは見られなかった（ $\chi^2(2)=1.004, n.s.$ ）。

実習前、実習後を問わず、短期大学で取得可能な免許・資格に関連する職種に就こうと考える学生の数が多い。しかしながら、実習を経験することが、就職希望に全く影響を与えないわけではない。実習前に「就職する」と解答していた45名中2人が「就職しない」と「不明」にそれぞれ1人ずつ選択を変えた。また、実習前に「就職しない」と解答していた7名中4名が希望を変更し、「就職する」、「不明」にそれぞれ2名ずつ選択を変えた。また、実習前には「不明」だった3名中2人が「就職する」に選択を変更した。

2) 就業自己イメージの変化

就業自己イメージ得点に対して、時期（2：実習前、実習後）と就業自己イメージ因子（7：独自、競争、自閉、自己高揚、拘束、支配、融和）を独立変数とした被験者内2要因分散分析を行った。

表1 実習前後における就職希望の変化（人数）

実習前 \ 実習後	就職希望			合計
	就職する	就職しない	不明	
就職する	43	1	1	45
就職しない	2	3	2	7
不明	2	0	1	3
合計	47	4	4	55

表2は、各条件の平均を示したものである。分散分析の結果、交互作用が有意であった（ $F(6,324)=4.43, p<.01$ ）。そこで、各就業自己イメージにおける実習前後の単純主効果を分析した結果、競争性、自閉性および融和性において有意差がみられた（ $F(1,54)=6.43, p<.05$ ； $F(1,54)=8.57, p<.01$ ； $F(1,54)=15.66, p<.01$ ）。また、実習前における就業自己イメージの単純主効果を分析した結果、それぞれに有意差がみられた（ $F(6,324)=97.09, p<.01$ ； $F(6,324)=95.12, p<.01$ ）。LSD法による多重比較の結果、実習前では、拘束性>独自性>融和性>競争性=自己高揚性=支配性=自閉性、競争性>支配性=自閉性、自己高揚性>自閉性（ $Mse=0.40, p<.05$ ）、実習後では、拘束性>独自性>融和性=自己高揚性=競争性=支配性=自閉性、融和性>競争性、支配性、自閉性、自己高揚性>支配性、自閉性、競争性>自閉性（ $Mse=0.47, p<.05$ ）となった。

したがって、幼稚園実習の経験は、就業自己イメージに対して、競争性、自閉性、融和性を低める効果を学生にもたらしたといえる。

4. 考察

本研究の目的は、幼稚園実習が学生の就業自己イメージに与える影響について検討することであった。その結果、幼稚園実習は、競争性、自閉性、融和性を低下させ、学生の就業自己イメージに変化をもたらすものであることが示された。すなわち、学生は幼稚園教諭の像を、競争性、自閉性、融和性においては弱く、その他の項目は実習前にもっていた像と変わらず必要とする職業であるとイメージしたと言えよう。

競争性は、仕事上の優劣がはっきりしたり、他者と競い合ったりすることを示す内容である。教育実習を経て、競争性のイメージが低下したということは幼稚

表2 実習前後における就業自己イメージの平均得点と標準偏差

	幼稚園実習前		幼稚園実習後		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
独自性	4.96	.75	4.81	.87	
競争性	3.63	.68	3.42	.58	$p<.05$
自閉性	3.12	.69	2.90	.67	$p<.01$
自己高揚性	3.43	.91	3.47	.90	
拘束性	5.31	.57	5.34	.61	
支配性	3.37	.83	3.17	.86	
融和性	4.18	1.03	3.68	1.13	$p<.01$

園教諭は保育士に比べて、職場の中で能力の優劣が明確になる職業ではなく、同僚間で競い合うというイメージがないと学生の目に写ったのではないかと考える。

自閉性は、仕事上における責任は軽く、仕事上での深い付き合いや親しくない人との接触を避けるような内容である。すなわち幼稚園実習を経て、自閉性得点が低下したことは、仕事上において重い責任や深い付き合いをもちながら、仕事をしていく自分というイメージを抱いたのだと解釈できる。幼稚園教諭は幼稚園というひとつの集団に所属しながらも、単数担任制で、基本的に自分の担当クラスについては自分が責任を負う。それ故に、複数担任性の保育所保育士や、様々な職種がチームで動き、ローテーションで勤務する施設保育士の仕事のイメージと幼稚園教諭の仕事のイメージが異なるのではないだろうか。自分の教育観を打ち出しクラス運営をしていく上においては、対立することもやむを得ないというイメージを抱いたのであろうと思われる。

融和性は、仕事上の人間関係が友好的であり、上司・部下の区別なく気楽な付き合いができるというような内容である。幼稚園実習を経て、融和性得点が低下したことは、仕事上の人間関係は友達つきあいとは一線をかくし、気楽な付き合いではすまないというイメージを抱いたのだと解釈できる。この結果は、自閉性得点の低下、すなわち、親しくない人、気が合わない人とでも仕事の上では付き合いなくてはいけないというイメージの変容と一致する。

これまで平成17年度入学の女子学生の就業自己イメージの変化を追ってきたが、今回の結果は伊藤ら⁹⁾、岡田ら（未発表）とは異なる側面で、就業自己イメージの変容が見られた。競争性、自閉性、融和性の3つの得点が低下したことは矛盾しない。伊藤ら⁹⁾、岡田ら（未発表）は保育実習をとりあげたものであり、本研究は教育実習をとりあげている。保育士と幼稚園教諭の大きな違いは、保育士が生活援助を中心業務とする一方で幼稚園教諭は教育援助を主な業務とするところにある。また、勤務にローテーションがあり、複数担任制を敷いていることが多い保育士に対して、クラスの子どもの迎え入れから送り出しまで1人で担当する、単数担任制の幼稚園教諭という違いも大きい。

生活援助に比べて、教育は価値的要素が強い。特に、幼児教育では教員が自分自身の教育観をしっかり持つ

ことが重要であると考えられている。それぞれの持つ教育観に対して甲乙つけがたく、また教育効果という点においても瞬時に明らかにはならないために、優劣がはっきりしない。このような意味において、教員同士教育観の違いがあっても、競い合う必要が生じない。また、単数担任制はお互いに独立した存在として、子どもたちに関わり教育援助をする姿としてとらえられる。幼稚園教諭は保育士と比べて自分の考え、自負心を持ち、幼稚園は自分の力が試される職場として学生の目に映ったのだと推察する。

清水ら⁶⁾は女性の就業希望の強さと競争性は負の影響であることを示している。すなわち、仕事上の優劣が明確になったりしないこと、他者と競い合わないことは働きたいという意欲につながるのである。また、自分の能力が試せたり、困難な仕事に挑戦する機会が得られたりすることも、女性の就業希望を高めることが明らかになっている。したがって、幼稚園実習は、就職に向かってよりよい方向へと、学生の就業自己イメージを変容したということがいえよう。

5. 文 献

- 1) 宗方比佐子：職業の選択（第1章）、「キャリア発達の心理学—仕事・組織・生涯発達」宗方比佐子、渡辺直登（編著）、東京：川島書店、pp. 13—29, 2002.
- 2) 榎本和生：大学等における就職・進学等への指導・援助、進路指導71(10)：27—32, 1998.
- 3) 富安浩樹：教育実習体験による進路決定自己効力の変容に関する研究、日本教育心理学会総会発表論文集37：583, 1995.
- 4) 浦上昌則：女子短大生の職業選択過程の研究—進路選択に対する自己効力、就職活動、自己概念の関連から—、教育心理学研究44：195—203, 1996.
- 5) 高村和代：進路探求とアイデンティティ探求の相互関連プロセスについて—新しいアイデンティティプロセスモデルの提案—、名古屋大学紀要44：177—189, 1997.
- 6) 清水 裕、下斗 淳、風間文明：大学生の就業自己イメージ尺度作成の試み、社会心理学研究20(3)：191—200, 2005.
- 7) 小河晶子、樟本千里、岡田恵子、鎌野智里：新入短大生の職業意識と専門選択の動機に関する研究—第一看護科、介護福祉科、医療保育科の比較を通して—、川崎医療短期大学紀要25：51—56, 2005.
- 8) 樟本千里、小河晶子、岡田恵子、伊藤智里：就業自己イメージと専門選択の動機に関する研究：保育者養成校における比較、川崎医療短期大学紀要26：105—111, 2006.
- 9) 伊藤智里、小河晶子、樟本千里、岡田恵子：保育所実習前後の就業自己イメージの変容、川崎医療短期大学紀要26：113—116, 2006.

資料1 大学生の就業自己イメージ尺度 (清水ら2005より作成)

因子	項目	因子	項目
独自性	自分の仕事に熱中できそう	自閉性	恥ずかしい仕事はしないでいられそう
	仕事を通して自分を表現できそう		好きな仲間と一緒にいられそう
	毎日気持ちにはりのある生活が送れそう		自分を仕事人間にしないでいられそう
	自分にとって楽しいと思えそう	自己高揚性	多くの人からあこがれのまとなりそう
	自分にとっての自信につながりそう		多くの人から尊敬されそう
	積極的になれそう		他人からほめられそう
	他人と違う自分の長が打ち出せそう		偉い人とみられそう
	誇りをもてそう		仕事上では、立派な人間だと思われそう
	すべきことに没頭できそう		人気者になれそう
自信をもって職務をこなせそう	他人から注目されそう		
平凡な人間にならずに暮らしていけそう			
家庭的な雰囲気職場に嫌気がさしそう			
競争性	仕事上の勝ち負けをはっきりつけられそう	拘束性	目上の人への配慮が求められるそう
	競い合う人間関係にも身をおくことができそう		仕事上での上下関係が厳しくなりそう
	仕事上での優劣がはっきりしていそう		仕事では常に上下関係を意識していなければならなさそう
	競争を通して緊張感のある職場が得られそう		他の誰かのいうことに従わなくてはならなさそう
	この仕事では食うか食われるかの関係がくれそう		公私の区別がはっきりしていそう
	仕事をしていく上で、敵・味方をはっきりさせられそう		仕事相手との歩調を合わせる事が求められそう
	厳しい競争をしないでいられそう		やるべきこと、してはいけないことが職務上ははっきりしていそう
	何よりも仕事で勝つことが自分のためになりそう		多くの人から適切に職務を遂行することが求められていそう
	実力次第で人の上に立てそう		この仕事では、周りの人と協同することが求められそう
仕事上、他人を使うことができそう	自分本位の振る舞い方であっても許されそう		
仕事上ではドライな人間関係にとどめていられそう	上司の顔色をうかがう必要がなさそう		
自閉性	他人と対立せずすみそう	支配性	他人を従わせることができそう
	敵を作らずすみそう		他人に賞や罰を与えることができそう
	拘束されないすみそう		仕事上では、リーダーシップをとることができそう
	仕事に不安を感じないすみそう		仕事上、相手の言い分に関わらず自分の思うように仕事が進められそう
	仕事の上で自分は歯車の1つ程度の責任しか負わずすみそう	融和性	仕事上での人間関係では、発言力をもてそう
	仕事では深いつきあいをしないですみそう		仕事上の人間関係も友達のようなものにできそう
	他人に気を使わないので楽でいられそう		仕事上のつきあいでは、みな同じでいられそう
	人から敵対心をもたれずすみそう		上司・部下とも気楽につきあえそう
	嫌いな人とつきあわずすみそう		仕事上でも腹を割ってつきあえそう
自分の責任は軽くてすみそう	仕事上では誰とでも友好的でいられそう		
プライベートが守られそう			